The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語外的条件による過剰適応 : コミュニケーション行動の言語社会心理学
Author(s)	オストハイダ, テーヤ
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2001, 35, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56550
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語外的条件による過剰適応

── コミュニケーション行動の言語社会心理学 ──

オストハイダ・テーヤ

1．はじめに

言語によるコミュニケーションという行為を全面的に把握するためには、言語そのものだけではなく、コミュニケーション行為以前の様々な物理的、社会的、心理的条件も考慮しなければならない。本稿ではまず、先行研究が提供したモデルを参考に、言語／コミュニケーション行動（以下、言語行動）を構成、左右する要因について考察し、「言語外的条件」に関する定義と位置づけを再検討する。その上で、言語外的条件と言語行動の相関関係を示す一現象として、「言語外的条件による過剰適応」を題材とし、実際の調査から得られたデータに基づき、外国人とのコミュニケーション、及び車椅子使用者とのコミュニケーションに見られる過剰適応のいくつかの具体例を分析する。本稿の後半では、「過剰適応」に関する理論的枠組みとして、言語社会心理学の「コミュニケーション・アコモデーション理論」を採用し、アコモデーション行動の多様性のなかで「過剰適応」の明確な位置づけと定義を試みる。また、アコモデーションに関する従来のモデルの問題点を指摘し、より詳細なモデルを提案する。

2．「言語外的条件」に関して

言語行動を構成、左右する要因を「構成要素」として分類したHymes

(1972) のモデルは言語行動研究に多大な影響を及ぼした。Hymes は、言語行動の構成要素をメッセージの形と内容、場面、参加者、目的、言語形式、行動の規範など、16の詳細な項目に分けている。だが、この分類に基づいて形成されてきた言語行動のモデルにおいて、構成要素の類型が明瞭ではないという指摘がある（ネウストプニー 1979)。即ち、「構成」を重視する Hymes 系統のモデルでは、それぞれの構成要素の言語内的、言語外的性質についてはあまり考慮されていない。この点に関して、南 (1979) が提供した「内的条件」と「外的条件」の区別が挙げられる。南は（非)言語的表現内容、及び（非)言語的表現材料を内的条件として定義した上で、外的条件を次の三種類に分けている。「指示対象」(ことばの意味に対応する実際の世界のものごと)、「主体的意向」(外的条件、内的条件に対する言語主体の心理的側面)、「付随的状況」(場面、時、表現手段など)。この分類に関しては次のような問題点がある。即ち、各条件に関する話し手の意識である「主体的意向」は広義では外的条件の一つであるが、このような心理的要因を他の外的条件、また内的条件と同レベルの要因として分類すると、要因全体の相関関係が説明しにくいのである。そのため、筆者はこの要因を「心理的フィルター」と呼び、別の項目として扱うことにする。

以上のモデルの特徴と問題点を考慮し、筆者は言語行動を構成、左右する要因の類型を以下のように考えている。(南の分類と異なり、筆者は非言語的表現を言語的表現の一種としてとらえているため、以下の分類では非言語的表現材料と非言語的表現内容が 2a) ないし 2b) に含まれている。なお「オーディエンス」という概念は Bell 1984による。)

1）言語外的条件

a）状況的言語外的条件: 場面、時、表現手段など（南の「付随的状

況」に相当する)

b) 参加者(話し手/聞き手/オーディエンス)が有する言語外的条件: 外見、属性、年齢、心理状態(ムード)など

2) 言語内的条件

a) 参加者(話し手/聞き手/オーディエンス)の言語的表現材料(使用言語、言語変種、コード、ジェスチャー、言語能力など)

b) 参加者(話し手/聞き手/オーディエンス)の言語的表現内容

3) 心理的フィルター

1)、2)の各条件に関する話し手の意識(認識、留意、態度、期待、想定、先入観など)

3. 言語外的条件による「過剰適応」

以下、モデルの1b)の言語外的条件のなかの「外見、属性」に焦点をあて、それらの条件に関する話し手の意識(特に意志の疎通に関する想定や先入観)と話し手の言語行動との相関関係について考察する。それらの言語外的条件は、言語内的条件(話し相手の真の言語能力による意志の疎通の可能性の有無)より、話し手の行動に重要な影響を及ぼし、話し手の言語行動が不適切となることが少なくない。例えば、話し相手との意志の疎通に関しては全く問題がないにも拘わらず、話し相手の外見的特徴や年齢などに関する話し手の意識により、話し手が簡略化言語を使用することや話し相手を無視し第三者に返答することなどが観察される。先行研究では、このような「過剰適応」は主に対老人言語行動において考察されており、老人に対するベビー・トーク的な言語行動や「patronizing speech」(過剰に優しい言葉遣い)などが指摘されている。(Ashburn & Gordon 1981, Gould & Dixon 1997, Ryan et al. 1986, Ryan et al. 1995)。

3.1. 対外国人言語行動に見られる過剰適応

対外国人言語行動に関しても、非母語話者（以下NNS）の（人種などによる）外見的特徴と母語話者（以下NS）の言語行動の相関が指摘されている（Long 1983, Meisel 1977)。日本人の対外国人言語行動を調査したオストハイダ（1999）では、言語外的条件による数種類の過剰適応が確認されている。そのなかから二つを以下で概観する。

a）NNSの言語外的条件（外見）により、NSがNNSの真の言語能力に準拠せず、簡略化言語や他言語を用いる。

NSによる他言語の使用に関しては、次の結果が挙げられる。外見（外見的に明らかに外国人と判断できるか否か）と日本語能力により、4つのグループに分けて分析した115人の外国人のインフォーマントの経験と意識によると、日本人に日本語で話しかける時、日本語で返答される割合は以下の通りである（調査の詳細に関してはオストハイダ 1999を参照)。

――外見により外国人と判断しやすく、日本語能力が低い（以下 異低）
71%

――外見により外国人と判断しにくく、日本語能力が低い（以下 同低）
75%

――外見により外国人と判断しやすく、日本語能力が高い（以下 異高）
80%

――外見により外国人と判断しにくく、日本語能力が高い（以下 同高）
97%

日本語能力が同様に高度である「異高」と「同高」のインフォーマントの回答の相違から、「異高」のような外国人のNNSに対する過剰適応の存在が示唆される。

b）NNSの言語外的条件（外見）により、NSがNNSの真の言語能力に準拠せず、話しかけたNNSを無視し、第三者のNSに返答する。

〈日本人の友達と一緒にいる時に、あなたが他の見知らぬ日本人に日本語で話しかけたとします。その話しかけられた日本人は誰に向かって答えることが多いですか。〉という質問に対する「異高」と「同高」に該当するインフォーマントの回答も上の項目と同様な傾向を示し、言語外的条件と過剰適応の相関がさらに明確になる。

—— 自分に向かって　「同高」83.3%；「異高」41.2%

—— 一緒にいる友達に向かって　「同高」16.7%；「異高」58.8%

両項目の結果は次のように解釈することができる。外見的に明らかに外国人と判断できる「異高」のような外国人に話しかけられた場合、その外国人の日本語能力が高度であるにも拘わらず、多くの日本人聞き手は、言語外的条件により、その外国人の日本語能力に限界があるという前提から離れられない。その結果、NSの言語行動が不適切となる。

上の言語行動のモデルでは「心理的フィルター」という概念を導入した。対外国人言語行動に関しても、NNSの言語外的条件（属性）に対するNSの（態度、先入観、過去の経験などによる）意識は過剰適応的な言語行動を引き起こしうることが予測される。筆者が行った意識調査（日本国籍を有する高校生以上の日本語母語話者220人を対象、調査の詳細に関してはオストハイダ 1999を参照）の結果から、日本人の対外国人言語行動におけるNSの心理的フィルターとして、例えば次のようなものが挙げられる。外国人と話す機会が「よくある」(35人)、または「たまにある」(122人)インフォーマントのなかで、外国人話し相手が「主に東洋人である」と回答した人の9割以上は主に日本語でその外国人とコミュニケーションをするのに対し、外国人話し相手が「主に西洋人である」と回答した人の7割以上は主に英語でコミュニケーションを行う。また、インフォーマント全体の5割は「話した東洋の外国人の半数以上が日本語能力には支障が

なかった」と回答したのに対し、8割は「話した西洋の外国人の半数以上が簡単な会話しかできなかった」、または「全く話せなかった」と回答した。この結果から、NSの経験及び意識と、上で見た「異高」のような外国人に対する過剰適応との関連が示唆され、多くの日本人が見知らぬ西洋の外国人と接する時に、その人の日本語能力が低いことを前提とする傾向が説明されうる。

3.2. 対障害者言語行動に見られる過剰適応

老人や外国人と同様、障害者とのコミュニケーションにおいても、話し相手の言語外的条件による意志の疎通の可能性に関する話し手の想定と言語行動との相関が存在することが予測される。その相関を確認するため、筆者は車椅子を使用する身体障害者を対象に、アンケート／インタビュー調査を行った（オストハイダ 2001)。インフォーマント（40人）は切断、脊髄損傷、頚椎損傷のため車椅子を使用し、調査期間（2000年8月）に車椅子バスケットボール大会や練習に参加していた人である。全員が言語能力（社会言語能力を含む）に全く支障がない。ただ身体障害のため車椅子を使用するという外見的特徴は指摘される。インフォーマントの内省から、この言語外的条件が健常者の言語行動にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることが調査の目的であった。

一つの質問項目では、上で見た外国人に対する過剰適応（話しかけた人を無視し、第三者に返答する）と同様の場面に関するインフォーマントの経験と意識を聞いた。〈身体障害をもたない人と一緒にいるとき、あなたが他の見知らぬ人に話しかけたとします。その話しかけられた人は誰に向かって答えることが多いですか。〉という質問に対して、21人は「主に自分に向かって」、8人は「主に一緒にいる人に向かって」、11人は「半々」と回答した。健常者と一緒にいる時、障害者が無視される可能性が高いこ

とは社会心理学の分野でも指摘されている（岡原他 1986，山崎他 1993）が、本調査では更に、上の質問に「主に一緒にいる人に向かって」、また「半々」と回答したインフォーマント19人に、以下の質問に関して回答を依頼した（自由回答）。

a）〈このような経験はどういう場面で多いですか。〉健常者に無視されることが起こりやすい場面として、「道を尋ねる（人に教えてもらおうとする）時」（4人）、また「買い物」（3人）、「受付」（2人）、「レストラン」（1人）などが挙げられた。意志の疎通が仕事の効果的遂行に要求され、また知識の効果的伝達が期待されることがこれらの場面の特徴であり、意志の疎通が人間関係より優先される場合が多いため、言語外的条件に関する誤解も起こりやすいと思われる。また、2人のインフォーマントが「一人では無理な時／できないことを頼む時」と回答した。この回答については、車椅子使用者の言語外的条件（身体障害）が直接に話題になる際（階段で運んでもらおうとする時など）、声をかけられた健常者が相手の言語外的条件をより強く意識していることが考えられる。「公の場／人がたくさんいる所」という他の2人のインフォーマントの回答は解釈が容易ではないが、一人は相手がどう対応すればいいか分からないこと、もう一人は相手が失言を気にしていることを相手の行動の原因として挙げている。このことから、声をかけられた健常者が自分の行動に対する回りのオーディエンスの評価を気にしていると考えられる。他の回答は「色々／特にこれといった場面はない」（2人）と無回答（3人）であった。

b）〈相手の行動の原因についてどうお考えですか。〉無視される原因に関して、「相手は情報が障害者より健常者に伝えやすいと思っている」、「難しいことが分からないと思われる」、「障害についての誤解」などのように、意志の疎通の可能性に対する健常者の先入観を指摘している意見が最も多く挙げられた（6人）。これらの回答と次に多い意見「相手がどう

対応すればいいか分からない」(4人)や「相手が失言を気にしている」(1人)は同様に、本調査の他の項目で確認した、車椅子使用者に対する健常者の言語行動の一つの特徴「障害者に対する理解/知識不足のため接触を回避する」と関連している。また、2人のインフォーマントが目線の高さの違いを原因として挙げた。この原因に関してはより詳細な研究が必要であるが、本調査の結果から、目線の違いより、意志の疎通の可能性に対する不安や誤解の方が、健常者の言語行動に重要な影響を及ぼすことが予想される。(本項目では他に「分からない/考えたことはない」という回答(4人)があり、無回答(3件)と複数回答(1件)もあった。)

以上、対外国人言語行動と対障害者言語行動を対象に、言語外的条件による過剰適応とその心理的背景について考察した。対障害者言語行動に関しては、障害を持たない人の経験と意識を対象にする研究が今後の課題として残されているが、今回の車椅子使用者の内省からも、身体障害という言語外的条件に対する健常者の話し手が有する「心理的フィルター」のいくつかの側面が示唆される。

4. 過剰適応の理論的枠組み「アコモデーション理論」

上で具体的に考察した「過剰適応」の理論的枠組みとして、言語社会心理学で提唱された「コミュニケーション・アコモデーション理論」(Giles & Coupland 1991, Niedzielsky & Giles 1996)、(以下CAT)を援用することができる。本章ではCATに関する従来のモデルを検討しつつ、「過剰適応」を含むアコモデーション行動の多様性を示すために、より詳細なモデルの構成を試み、CATの展開と限界について考察する。

4.1. 客観的アコモデーションと主観的アコモデーション

言語行動を「コンバージェンス（Convergence)」(話し手が自分の言語行動を聞き手に合わせること、以下Con）と「ダイバージェンス（Divergence)」(話し手が自分の言語行動を聞き手に合わせないこと、以下Di)の概念から検討することがCATの出発点（Giles 1973, Giles & Powesland 1975）であり、ConとDiに関するモデルは現在まで様々な展開を見せている。そのなかで、Thakerar et al. (1982) の「客観的Con／Di」と「主観的Con／Di」の区別は一つの重要な展開である。Thakerar et al. によると、客観的Con／Diは話し手の実際の言語行動である（客観的に計れば、聞き手に合わせたものであるか否か)。それに対して、主観的Con／Diは話し手個人による自分の言語行動に対する主観的意識である。以下の図1（Thakerar et al. 1982, p.238 による）で示しているように、ConとDiには4つの組み合わせが考えられる。

Thakerar et al. ではA, B, C, Dに対する用語が導入されていなかっ

図1

	主観的 Convergence	主観的 Divergence
客観的 Convergence	A	B
客観的 Divergence	C	D

たが、AとDを主に扱ってきた先行研究は、Aを「Accommodation」、Dを「Non-Accommodation」としている（Giles & Powesland 1975)。後に、Cに対して「Overaccommodation」という用語が導入された(Ryan et al. 1986)。筆者の知っている限りでは、Bに関する用語はまだないが、この点に関しては下で紹介する筆者のモデルにおける「Latent Accommodation」を参照されたい。

4.2. 従来のモデルの問題点と新たなモデルの提案

従来のCon／Diの定義とそれに関するモデルには次のように大きな問題点が挙げられる。まず、Con／Diを「聞き手に合わせたものであるか否か」としてThakerar et al.がいうように、「客観的に計る」ことは不可能である。つまり、実際の言語行動と話し手の主観的意識の区別には、聞き手の主観が全く考慮されていない。ConとDiに関しては、まず話し手と聞き手両者の主観を見る必要がある。その上で、両者の主観の組み合わせを客観的に「実際のアコモデーション行動／状況」として定義すべきであろう。また、今までのCATに関する研究では、「Maintenance」（話し手が自分の言語行動を変えないこと、以下Mt）が一般的にDi（聞き手に言語行動を合わせない行動）として見なされてきたが、Mtにも話し手と聞き手両者の主観によるCon／Diがあると考えなければならない。現に、Mtによる話し手／聞き手相互のCon（例えば、同じ言語変種を有する話者同士がその言語変種で会話をするような場面）が最も一般的であると思われるにも拘わらず、CATに関するモデルでは考慮されていない。

この二つの問題点を踏まえ、筆者は以下（図2）のようなモデルを提案したい。従来のモデルにおける「主観的Con／Di」と同様、自分の言語行動に対する話し手の主観が一つの分類基準であるが、それに話し手の言語行動に対する聞き手の主観を加え、その組み合わせを「実際のアコモデーション行動／状態」として分類する。そして、話し手が言語行動を変える場合と変えない場合に分け、アコモデーションを「evoked」と「given」として分析する（このモデルでは、先行研究との関連を明確にするために英語の用語を用いる）。なお、本稿では紙幅の都合により、「過剰適応」と一致する「Hyperaccommodation」以外、各項目に関する詳細な定義を割愛するが、以下各項目を簡単に解説する。

図2

	主観的		客観的
	話し手	聞き手	実際のアコモデーション行動／状態
言語行動を変える場合	Con =	Con =	① Accommodation (evoked)
	Di ≠	Di ≠	② Anti-Accommodation
	Con =	Di ≠	③ Hyperaccommodation
	Di ≠	Con =	④ Latent Accommodation (evoked)
言語行動を変えない場合	Con =	Con =	⑤ Accommodation (given)
	Di ≠	Di ≠	⑥ Non-Accommodation
	Con =	Di ≠	⑦ Hypermaintaining
	Di ≠	Con =	⑧ Latent Accommodation (given)

項目①と⑥に関しては、カナダのフランス語社会と英語社会のフランス語／英語バイリンガル話者間でのコミュニケーションに見られる Accommodation／Non-Accommodation を考察した Giles et al. (1973) を参照されたい。先行研究では②のような組み合わせも「Non-Accommodation」として扱われているが、筆者のモデルにおける⑥との区別は話し手が自分の言語行動を変えるか否かによる。例えば、上の Giles et al. ではフランス語社会のバイリンガルの話し手が英語社会の聞き手に対してフランス語のみを用いることは「Non-Accommodation」(言語行動を変えないことによる Di) であるが、次の Bourhis & Giles (1977) の研究の結果は「Anti-Accommodation」(言語行動を変えることによる Di) の例である。語学学校でウェールズ語を習っている英語母語話者のウェールズ人に対して、非ウェールズ人英語母語話者がウェールズ語学習の意義を否定する。この結果、ウェールズ人が自分のアイデンティティを強調するため、ウェールズ語の音声的特徴やウェールズ語の単語を母語の英語に織り交ぜ始める。

①と⑤の区別も同様である。上に既に指摘したように、先行研究のほとんどが①のような「evoked Accommodation」を扱っている（例えば、上の Giles et al. ではフランス語社会の話し手が英語社会の聞き手に対して英語を用いるような場面)。一方、同じ第一使用言語変種を共有する話者同士が、(その言語変種の使用を望みつつ）その言語変種で会話をするような「given Accommodation」は、先行研究ではほとんど考慮されていない。この問題点は、Con に関して、話し手が自分の言語行動を聞き手の行動に合わせるために変えることを前提とする多くの CAT 研究の理論的誤解から生じる。確かに「Accommodation」という用語により、動的なものが示唆されるが、Mt という静的な概念をアコモデーションの一種として導入するなら、Con と Di 両者による Mt も考慮しなければならない。

上の 2. で具体的に考察した「過剰適応」は③の「Hyperaccommodation」と一致する。詳細な定義に関しては下の 5. を参照されたい。「Hyperaccommodation」と⑦の「Hypermaintaining」は上の Thakerar et al. のモデルから導き出された用語「Overaccommodation」の下位分類である。従来の CAT 研究では Mt が Di として見なされてきたため、「Hypermaintaining」を具体的に扱う先行研究が見当たらないが、次の研究結果によりこのようなアコモデーション状態の存在が示唆される。Gould & Dixon (1997) は、診察場面（薬についての説明）における医者の 2 パターンの言語行動（普通の話し方・過剰に優しい話し方）に対する老人の意識を調査した。多くのインフォーマントから、医者による過剰に優しい話し方が子供扱い（つまり「Hyperaccommodation」）と批判された一方、あるインフォーマントからは普通の話し方が「分かりにくい」という意見もあった。即ち、(例えば「patronizing speech」に対して抵抗感を持つため）自分の言語行動を変えない医者による Con の意識での

Mt は、聞き手からも同様に Con として解釈されるとは限らないことが分かる。このような場面は「Hypermaintaining」で説明することができる。

④と⑧の「Latent Accommodation」は上の Thakerar et al. のモデルの項目 B に相当し、話し手による Di は聞き手に Con として解釈される現象を示している。先行研究では、このアコモデーション行動／状態に関する用語や実際のデータはまだ提供されていないが、次のような例が考えられる。関東で、関西方言話者が自分のアイデンティティを保持するために、自分の言語行動を変えずに NNS に対しても母方言を用いる。だが、この状態は関西で日本語を習得した NNS にとっては好ましい。この例のような「given Latent Accommodation」に関する研究材料は比較的多いと思われるので、実際のデータを扱う研究が要求されよう。

5．まとめ

本稿の前半では、「言語行動のモデル」のなかの「言語外的条件」と話し手が有する「心理的フィルター」を定義し、両者の相関の一端を示す「過剰適応」のいくつかの具体例を分析した。後半では、言語行動における「アコモデーション」の多様性について考察し、より詳細なモデルの構成を試みた。本稿で扱ったモデルと実際のデータの分析の結果を総合すると、「過剰適応（Hyperaccommodation)」は、以下のように定義することができる。

> ある話し手が何らかの言語外的／内的条件（に対する意識）により、自分の言語行動を聞き手に合わせる必要があると想定し、自分の言語行動を変える（話し手の意識によるコンバージェンス)。だが、聞き手からは、話し手の行動は適切ではないと解釈される（聞き手の解釈によるダイバージェンス)。その結果、両者のコミュニケーションに何らかの不調が起こりうる。

上で提案したアコモデーションのモデルの全項目も同様に定義することができるが、多くの項目について実際のデータがまだ見当たらない。その収集と分析が今後の研究の重要な課題である。

【参考文献】

岡原正幸／石川　准／好井裕明（1986）「障害者・介助者・オーディエンス：障害者の［自立生活］が抱える諸問題」『解放社会学研究』1, 25-41

オストハイダ・テーヤ（1999）「対外国人言語行動と言語外的条件の相互関係」『日本学報』18, 89-104

オストハイダ・テーヤ（2001）「車椅子使用とコミュニケーション」『多言語社会研究会年報』1

ネウストプニー, J.V.（1979）「言語行動のモデル」南不二男編『講座言語3 言語と行動』33-66 大修館書店

南不二男（1979）「言語行動研究の問題点」南不二男編『講座言語3 言語と行動』5-30 大修館書店

山崎敬一／佐竹保宏／保坂幸正（1993）「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力：〈車いす使用者〉のエスノメソドロジー的研究」『社会学評論』44(1), 30-45

Ashburn, G. & Gordon, A. (1981) Features of a simplified register in speech to elderly conversationalists. *International Journal of Psycholinguistics* 8, 7-31

Bell, A. (1984) Language style as audience design. *Language in Society* 13, 145-204

Bourhis, R.Y. & Giles, H. (1977) The language of intergroup distinctiveness. In Giles, H. (ed), *Language, Ethnicity and Intergroup Relations,* 119-135. London Academic Press

Giles, H. (1973) Accent mobility: a model and some data. *Anthropological Linguistics* 15, 87-105

Giles, H. & Coupland, N. (1991) Accommodating language. In Giles, H. & Coupland, N. (eds), *Language: Contexts and Consequences,* 60-93. Open University Press

Giles, H. & Powesland, R.F. (1975) A social psychological model of speech diversity. In Giles, H. and Powesland, R.F. (eds), *Speech Style*

and Social Evaluation, 154-181. London Academic Press

Giles, H., Taylor, D.M. & Bourhis, R. (1973) Towards a theory of interpersonal accommodation through language: some Canadian data. *Language in Society* 2, 177-192

Gould, O.N. & Dixon, R.A. (1997) Recall of medication instructions by young and elderly adult women - is overaccommodative speech helpful? *Journal of Language and Social Psychology* 16(1), 50-96

Hymes, D. (1972) Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, J. J. & Hymes, D. (eds), *Directions in Sociolinguistics,* 35-71. Holt, Rinehart and Winston

Long, M.H. (1983) Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers. *Studies in Second Language Acquisition* 5(2), 177-193

Meisel, J. (1977) Ausländerdeutsch und Deutsch Ausländischer Arbeiter. *Sprache Ausländischer Arbeiter, Zeitschrift für Linguistik und Literaturwissenschaft* 5(18), 9-53

Niedzielsky, N. & Giles, H. (1996) Linguistic accommodation. In Goebel, H., Nelde, P.H., Stary, Z. & Wölck, W. (eds), *Kontaktlinguistik,* 332-342. De Gruyter

Ryan, E.B., Giles, H., Bartolucci, G. & Henwood, K. (1986) Psycholinguistic and social psychological components of communication by and with the elderly. *Language and Communication* 6(1/2), 1-24

Ryan, E.B., Hummert, M.L. & Boich, L.H. (1995) Communication predicaments of aging: patronizing behaviour toward older adults. *Journal of Language and Social Psychology* 14, 144-166

Thakerar, J.N., Giles, H. & Cheshire, J. (1982) Psychological and linguistic parameters of speech accommodation theory. In Fraser, C. & Scherer, K.R. (eds), *Advances in the Social Psychology of Language,* 205-255. Cambridge University Press

(大学院後期課程学生)

Hyperaccommodation due to Extra-Linguistic Factors: Some Social Psychological Aspects of Communication Behaviour

Teja OSTHEIDER

Not only linguistic factors such as variety in language use or ability, but also a wide range of physical, social and psychological 'extra-linguistic' factors are to be considered when attempting to understand the complexity of communicative behaviour. In this paper, first the significance and definition of extra-linguistic factors is discussed in reference to former models on communication behaviour. Second, focussing on the correlation between physical appearance of the listener and psychological aspects of the speaker, data from surveys the author conducted on communication behaviour towards foreigners and wheel-chair users is analyzed in terms of hyperaccommodation due to extra-linguistic factors. In respect of the term 'hyperaccommodation' and its theoretical framework, Communication Accommodation Theory (CAT) is adopted and several controversial points of former models on CAT are discussed. The results are summarized by introducing a) a more detailed model of the different varieties of accommodation and b) a definition of hyperaccommodation considering both linguistic and extra-linguistic factors.

キーワード：言語／コミュニケーション行動　言語外的条件
アコモデーション理論　過剰適応